



材の種別によって実践研究をし具体的
な工夫をすることがたいせつである。
特に指導内容を定着させるため、展開
の部分に適した時間が配当されている
かどうかを検討することも必要である。
このような指導が展開されたときに
児童生徒の自主的な活動が、より活発
となり、体力や運動能力の向上も期待
できるものである。

三、運動技能の向上

学習における児童生徒の直接の目的
は、「なんとかして、さか上がりがで
きるようになりたい。」「ドリブルで相
手をぬくには、どうすればうまくいく
か。」というような欲求となつて現われ
るものである。

この欲求をかなえてやるのが、教師
のつとめである。

そのためには、

(一) 教師が、運動技術の要点をじゅ
うぶん理解していること。
それぞれの運動を支えている中

心的な技術は何か、また、その運
動を進めるための体力とは何かを
はつきりさせておくことが、児童
生徒の技能を高めるための出発点
となる。

(二) 技能の上達を阻害する一般的条
件を、研修や指導の経験から明ら
かにしておくこと。

(三) 指導法を工夫すること。
児童生徒が理解しやすいように
技能指導の手順を具体的に提示す
るとともに、反復練習をどうさせ
たらよいか等、指導法について検
討すること。

(四) 結果の指摘よりも、原因の究明
をすること。
単に現象をとらえて診断するは
かりでなく、そのような現象が、
なにに起因するかを、具体的に探究
することがたいせつである。

(五) 適切な運動量をおさえること。

そのための留意点として、
(1) 題材の種類・内容によって考
えること。

(2) 運動の時間、回数等によって
考えること。

(3) 児童生徒の発育・能力・意欲
等によって考えること。

(4) 教師の教材解釈・指導目標・
指導法を的確にしておくこと。

(5) 施設設備・用具を整備し、季
節や天候等を考慮すること。

(六) 意欲を喚起する到達目標を設定
すること。

児童生徒の学習意欲を喚起する
ためには、成功の喜びを感じさせ
ることがたいせつである。したが
って、児童生徒の能力に応じた到
達目標の設定が重要である。

〈例〉バスケットボールのシュート
十回のシュートで、五回成功させよ
うとして六回入った場合と、七回成
功させようとして六回入った場合の
内的報酬は、異なるものである。

このように考えると、児童生徒の
能力、興味、経験等を考慮し、個人
差に応じた到達目標の設定がたいせ
つになる。

(七) 個人差に応ずる指導をすること。
個人差に応ずる指導は、運動の
特性や、その運動に対する児童生
徒の能力差について分析的には握
しておくことが必要である。

〈例〉鉄棒運動(小学校二学年さか上
がり)
さか上がりは、「鉄棒を順手又は
逆手で握り、片足を踏み切り、他の
足を振り上げてさかさになり、腕を曲
げて体を鉄棒上に引き上げ、腹部を
軸にして後方に回り、体を起して腕
立て懸垂になる」という運動であ
る。